

現象主義の検討

田 村 均

1

知覚経験の認識上の価値に対しては、昔から一定の懐疑が提出されている。我々は知覚経験によって外的世界をありのままに認識しているのではなく、我々に対するその相対的なあらわれを認識しているにすぎぬのではないか、というのがそれである。この懐疑を鋭く提出するのが、錯覚論法(the argument from illusion)として知られる議論である。この議論によると、感官を通じて対象自体の性質をありのままに我々が捉えたと主張する時には、事物は、真直ぐであると同時に曲っているとかが、円形でありかつ楕円形であるとか、温いと同時に冷いかいった、両立しない性質を持つことになってしまうのである。

こうした反省から、知覚表象説が産み出される。知覚の直接的対象は、外界からの刺激に応じて得られる内的表象であり、これを通じて我々は外界を間接的に認識すると考えるわけである。だがこの考えに対しては、もしも内的表象のみが我々に知られるのであったら、〈外界〉という言葉が結局は無意味になってしまう、という反駁が成立する。これが、知覚表象説の矛盾である。

この苦境を脱する方向に現象主義がある。経験の出発点に、経験の範囲を原則として越えている対象と、それに対して表現的關係を持つ表象を置くのではなく、むしろ、*esse est percipi*なる現象を置くことによって経験の過程を説明しようとするものである。哲学史上では、ロックの知覚表象説からバークレーの現象主義へという道すがりがこれにあたる。ただし、バークレーは、現象(即ち、*esse est percipi*なる *idea*)についての考察から物体の存在を否定する結果となった。我々がこれから検討する現象主義は、このような極端なものではなく、より洗練された現象主義、A. J. エイヤーが“*The Foundations of Empirical Knowledge*”において主張する現象主義である。

エイヤーにおいては、現象(*esse est percipi*なるもの)はセンス・データである。そして彼は、我々の経験の出発点にセンス・データを置くことによって、我々が物体について語ることが正当化されると主張するのである。

我々の検討の中心は、従って、経験の出発点に *esse est percipi*なるセンス・データを置くことが正当か否かであり、センス・データを置かなければ我々が外界について認識しようと主張することができないのかどうか、である。エイヤーの主張に対するこのような吟味を、J. L. オースティンが“*Sense and Sensibilia*”において行っている。そこで、以下での我々の考察を、このオースティンの説を視野に入れつつ進めることにする。

エイヤーは、錯覚論法を分析することから、センス・データの導入をはかる。彼の考えでは、錯覚論法がうまく機能するためには次の二つの条件が必要である。第一に、人が直接的に覚知する(*directly aware*) のは物体(*material thing*) であるとする。第二に、物体自身の諸性質は同一性を保存すると考える。そして、この二つを承認すると、例えば、ある場所から円く見える硬貨が別の場所からは楕円形に見える、或は、真直ぐな棒を半ば水に浸すと曲がって見える、等々の事例においては、恒常不変であるべき物体に両立せぬ性質を同時に与えることになるから、感覚が我々を欺くということがここに示される。さらに、真正の(*veridical*) 知覚と欺きの(*delusive*) 知覚とに、知覚自体の本質的差異は無いから、我々はつねに欺かれているのかもしれないことになる。これが錯覚論法のしかける罫である。

この罫を抜ける普通の方法は、欺きの場合にも何かが知覚されていることは確実なのだから、これを観念とか印象とか表象とか名づけて、かつまた真正と欺きとで知覚自体に差異はないのだから、これらを我々の知覚過程の直接的対象とする、という方法であろう。だが、エイヤーはこの方法をとらない。

なぜならエイヤーによれば、錯覚論法が投げかけている問題は、我々が文字通り感覚によって欺かれている可能性があるという、事実の問題ではない。そうではなくて、知覚過程で現れる事実に対して、我々はいろいろな語り方が可能なのだという、言語の問題が投げかけられているのである。

錯覚論法の罫を抜けるには、その成立条件のうちのどちらかを拒否するよりない。普通の方法では、第一の条件を拒否して、知覚の直接的対象は物体ではない、とするわけである。では、ここらみに第二の条件を否定してみよう。つまり、知覚の直接的対象は物体であるが、物体は恒常不変でないことにしてしまうのである。例えば、硬貨の知覚が円形から楕円形に一連の変化をなした時、硬貨自体の実在的な形がそのように変化したのだと考えることにする。ところがこう考えても知覚過程に現れる事実には何の変化もない。いずれにせよ硬貨は円形から楕円形になるのだから。

すなわち、〈実在的な形〉という語句の意味を普通と大きく変えてしまって、〈実在的な形が変化した〉と語ろうと、より普通のやり方をとって、〈実在的な形は不変だが観察者の位置の変化によってその見え方が変わった〉と語ろうと、見えている事実が変化するわけではない。エイヤーの言によれば、「我々が硬貨の実在的な形(*the real shape*) は不変であるというところで、別の人物は、その形が本当に(*really*)ある一連の変化の過程を経たのだと言うのをより好む(*op. cit.* Part I . chap. 2)」ということなのである。だから、錯覚論法の罫を抜けるためにその成立条件を否定するとしても、知覚過程の事実には何ら変化はなく、ただその語り方を変えるだけだと考えるべきであること、これがエイヤーの考えである。

エイヤー自身も、普通の方法と同様に、第一の条件を否定して錯覚論法を無力化している。しかし、変えられたのは言葉づかいであって、知覚の事実ではない。さらに、この言葉づかいの変更に十分な根拠があるとエイヤーは考えている。

エイヤーの指摘するところでは、知覚する（perceive）見る（see）等々の語の普通の用法として、対象そのものないしその性質の存在を示唆する用法と、これらを示唆せぬ用法とがもともとある。「かりに私が曲がって見える棒を見ている（see）というとしても、私は何かが実在的に（really）曲がっていると示唆しているわけではなく、……二枚の紙を知覚している（perceive）と言うとしても、私は実在的に（really）二枚の紙がそこにあると示唆していなければならぬわけではない（op. cit. I-3）。」すなわち、感官のなんらかの不調によって視覚像が二重になっている時に〈二枚の紙が見える〉と言ったからといって、その発話は〈二枚の紙がある〉ことを意味しない。だがもちろん、〈二枚の紙が見える〉と言った時に、〈二枚の紙がある〉ことを示唆したい場合も当然ある。だから、知覚の対象の物体としての存在を示唆しない用法と、これを示唆する用法とは、二つながら正しくかつよく知られている（correct and familiar）ものとして認められよう。これがエイヤーの指摘の内容である。

明らかにされたことは、ごく普通の表現にあらわれる知覚の対象が、いついかなるときも物体のみであるとは限らないのだから、錯覚論法を無力化する語り方を我々はすでに持っているということである。錯覚論法が提起する欺きの知覚においては、我々は物体を知覚の対象としない語り方をとればよい。もとよりこの用法においても、知覚経験の対象として何かが言及されていることは確実であろう。この何かに名前をつけるのが便利である。これをセンス・データと名づけよう。かくして、知覚過程を分析する道具としてセンス・データが導入され、これに言及するセンス・データ言語が導入されることになる。だがしかし、エイヤーの強調するところによれば、センス・データの導入は知覚過程の事実をいささかも変えるものではない。たんにより整理された使いやすい用語法を採るだけのことである。物体に帰属するのではない性質について語ることが、ごく普通に認められるのだから、これをセンス・データ言語として洗練し、かつ、センス・データを導入したとして、何か批難すべき点があるだろうか、というわけである。

こうしてセンス・データが導入され、さらに、「欺きの知覚の場合にセンス・データを感覚していると言うようにするならば、欺きの時も真正の時も知覚の差異は質的な差異ではないから、この用法をすべての場合に拡張するのが便利である。（op. cit. I-3）」「かくして、人が直接的に覚知する対象は、知覚のあらゆる場合において、センス・データであって物体ではないという結論に達する。（op. cit. I-3）」このように主張されるのも、センス・データ言語が便利な言語だからである。「知覚の哲学的分析における主たる目的は、我々の感覚的経験と物体について我々が述べる命題との関係を分析することであるから、この我々の経験の内容に対して、それが表現しているとみなされる物体からは独立に言及できる用語法を持つこと、このことが目的に役立つのである。そして、この用語法をセンス・データ言語が与えるのである。（op. cit. I-3）」「しかしこの理論〔センス・データ理論〕を受け入れることは、ひとつの専門的な言語を使用するという決定より他の何も意味していないこと、これをはっきりと理解すべきである。（op. cit. I-5）」

あくまでも言語の問題として、という度重なる強調つきでセンス・データを導入することによって、いったいエイヤーは何をやろうとしているのだろうか。明らかに彼は、知覚表象説の矛盾を避ける道を確保しようとしているのである。なぜなら、センス・データは知覚の事実ではなく、事実

についての語り方のひとつなのだとすることにすれば、知覚過程の分析の道具としてセンス・データが導入されると同時に、知覚の事実についての語り方の別のひとつとして、外なる対象に言及する語り方も保存されることになる。センス・データを導入しても、外なる対象を語ることは無意味とならない。つまり知覚表象説の矛盾は回避されるのである。センス・データ導入のための錯綜した議論の到達目標はこのことであつたと解釈できる。

だが、この目標への到達過程に、実はひとつ疑問がある。エイヤーの議論のかなめとなっているのは、可能な語り方のいずれを採用しても、知覚過程の事実は変わらないということである。どういう語り方をしようと世界の見え方そのものは変わるまい、という常識が、エイヤーの言に裏づけを与えるように見える。だが、語り方を変えても事実は変らぬと主張するためには、選択肢となる語り方とは独立に、当該の〈事実〉が同定されていなければならない。すなわちエイヤーは、知覚過程の不変の事実を同定する言語を持つてなければならない。いったいこの言語は何なのか？まず最初に不変の事実を同定したはずのこの言語を、一貫して知覚過程の分析に用いることにしないのは、いったいなぜか？これが疑問である。この問題は、オースティンによる批判を考察する過程で解かれることになるので、ここでは提出するのみにとどめて、以下では、エイヤーがセンス・データに与えた具体的な規定を検討して行くことにする。

センス・データの規定は次の4者に帰着する。

- (1) センス・データは *esse est percipi* である。
- (2) センス・データは私秘的 (*private*) である。
- (3) センス・データ文は訂正不可能 (*incorrigible*) である。
- (4) センス・データ文は物体に言及する文 (以下、物体文) を検証する (*verify*) 。

このうち、(2)と(3)とは(1)の直接的帰結であり、(4)は(3)の系とも言うべきである。まず、(1)についてのエイヤーの言を見て行く。

すでに示されたように、センス・データ言語の効用は、物体に言及せずに感覚経験を語りうる点にある。しかし、もしも、あるセンス・データが感覚されてはいるが実は存在していないことがあるとすると、物体に言及する言語と同様に、センス・データ言語は欺かれた経験の記述を含むことになる。つまり、センス・データ文は物体文と同様にその真偽に疑いを残す文となる。よって、センス・データについては、真正と欺きという経験の区別を設けず、「センス・データが感覚されていることは、センス・データの存在の十分条件であるとせねばならぬ (*op. cit.* II-7)」のである。

次に、あるセンス・データが存在してはいるが感覚されていないことがあるとすれば、それは、「私がセンス・データをより注意して精密に調べれば……私は前には見出せなかった特徴をそのセンス・データに見出すことがある (*op. cit.* II-11)」と主張することを意味する。こう主張することは、またしてもセンス・データを物体に類似させてしまう。これを避けるためには、センス・データが変容した際には、同じセンス・データに新たな特徴が発見されたと語るかわりに、センス・データ自身が変ったのだ、と語るように規約を定めればよい。そうすればセンス・データは存在していれば感覚されている、即ち感覚されていることは存在することの必要条件となるであろう。

かくして、センス・データは *esse est percipi* であること、その感覚は存在の必要十分条件である

ことが定められる。この規定が、センス・データ言語の効用を確保するための言語使用の規約であることは、すでに明らかであろう。

esse est percipi という規定から、センス・データの私秘性がただちに出てくる。知覚は、各個体で別個な過程だからである。ただし、センス・データの私秘性も、事実としてではなく、言語使用上の規約として与えられる。即ち、別個の人間が数的に同一のセンス・データを感覚する、という語り方は無意味であると決めるのである。

だが、センス・データを私秘的としてしまうと、そこから出発して公共的 (public) なる物体の認識へ至ることは不可能とならぬか、という疑惑が生ずる。この疑惑を解消するためのエイヤーの方法は単純なものである。各人がセンス・データ言語を用いて語りながら、他人と自分が同じ物体について語っていることが了解されればよい。よって、「最も普通の方法は、そのものの描写のやり方についてお互いが一致するかどうかを検討することである。(op. cit. III-14)」つまり、自分の記述と他人の記述が一致するかどうかテストしてみて、一致すれば同じ物体について語っていることがわかる、ということである。

たしかに、これが最も普通のやり方であるのは疑いない。が、これが求められているものかどうかは疑わしい。なぜなら、私秘的な対象にもつばら言及する文が、どうして別個の人物間で了解され話が通じるのか不可解であるから。だが、この問題も後の課題としておく。

センス・データの訂正不可能性も、esse est percipi の規約からただちに導かれる。「私が問題のセンス・データだけを指摘する (designate) ためだけに、文を用いていると想定せよ、……この時私が誤る可能性があるだろうか。(op. cit. II-8)」エイヤーは、言葉上の誤り (a verbal mistake) 以外の可能性は無いと答える。センス・データは、感覚が存在の必要十分条件なのだから、有るものを無いと言ったり、無いものを有ると言ったりする可能性はない。よって事実の誤り (an error of fact) はありえない。言葉の選び方が不適切で誤る、という可能性が残るだけである。そして、この誤りは、言語使用に習熟していれば、たぶんおこらないものなのである。

この訂正不可能性は、完全に検証されている (completely verified)、或は、経験的事実の観察によって直接的に検証されている (directly verified by observation of an empirical fact) とも表現される。一方、物体文はこのような性格を持たない。そして、エイヤーによれば、「物体に言及するいかなる命題も、それが経験的に有意味であろうとするならば、センス・データの用語法によってともかくも表現可能でなければならない (op. cit. V-22)」つまり、〈これは犬である〉という物体文は、対象の感覚できる性質についての観察によって意味が明らかとなり、またその真偽が確かめられる。もちろん、いったんは真とされても、後には新たな観察報告に照らして偽とされることがあるから、物体文は完全には検証されえない。かくして、物体について語ることは、暗黙のうちに仮説的言明を述べることであり、仮説の経験的意味を明らかにし、それを検証するのは観察報告、即ちセンス・データ文であることになる。

エイヤーの現象主義の概要は以上である。esse est percipi なるセンス・データは、私秘的であり、もつばらこれのみに言及するセンス・データ文は訂正不可能であって、それゆえ物体文を検証する地位を占める、とまとめてよいだろう。センス・データとセンス・データ文とは、まさに〈経験的

知識の基礎)なのである。

3

オースティンのエイヤー批判は、エイヤーの議論の出発点を痛撃することから始まる。なによりもまず、我々の知覚の対象を、物体とセンス・データという二つの領域でのみ考えることが誤りである。椅子や机は確かに物体と呼べるだろう。だが、音声・炎・虹・影・蒸気・気体等々は物体なのか。物体でなければセンス・データなのか。明らかに、「我々が知覚する一種類のものがあるのではない、数多くの種類のものがある（“Sense and Sensibilia” I）」のである。

また、錯覚的な知覚では、つねに物体ではない対象が知覚されているというのも正しくない。晴れた日に海上の船を見ると、それは本当の距離よりも近くに見える。だが、この時、人は非物質的な船（an immaterial ship）を見る、など言うわけには行くまい。逆に、物体でないものを知覚することが、即座に錯覚的な知覚になるわけでもない。虹は物体ではないが、同時に錯覚でもないのである。

オースティンは沢山の例をあげて、物体・非物体という対立では知覚の対象が尽され得ないことを示している。つまり、物体とセンス・データ（非物体）という二分法で分析を開始し、最後はセンス・データだけを知覚の直接的対象として残すなどというやり方は、我々の知覚経験の多様性に全く不適合な過度の単純化であると、オースティンは言うわけである。

このことは、錯覚論法の評価がエイヤーとオースティンとでは全く異なることを意味している。オースティンにとっては、言語の問題どころか、何らの問題も錯覚論法は提示していないのである。

オースティンによれば、「円い硬貨が別の視点からは（或る意味で）楕円形に見えることは、まさに我々が予期しかつ普通に見出すことである（op. cit. III）。」また、「水の中で曲って見える棒は、まったくありふれた事例であるから、これを錯覚の事例であると正当に呼びうるものではない。（ibid.）」錯覚論法に従えば、後者の例では、真直ぐな棒が曲って見えるのだから、どちらかの視覚像が欺きであり、かつどちらかが物体の性質ではないことになる。だが、オースティンの考えでは次のようになる。我々は、水中に半ば浸された棒を見るとき、確かに曲がって見える棒を見ている。このとき我々が見るのは、確かに真直ぐの棒ではない。棒が曲って見える時にも何かを見ている、ということも全く正しい。だが、それが何であるか問う必要があるだろうか。「事実上、我々が見ているのは、水中に半ば浸された棒である。そして、このことが問題視されたとしたら、それは著しく異常である。……なぜなら、この記述は我々が出発点とした状況そのものの記述なのだから。（op. cit. III）」

問題が提出された時点ですでに、〈水中に半ば浸されて曲って見える棒〉を我々は見ている、と判明しているのである。始めから何を見ているのか判っているのに、あらためて何を見ているのか問いつめてどうするつもりなのか。こうオースティンは言っているわけである。

換言すれば、錯覚論法が提出する事例においては、我々は、その事例が提出される記述自体によって最もよく状況を把握してしまうのであり、その記述こそが最もうまく問題となっている知覚過程

を描写している。だから問題は何もない。事例が提出された瞬間に、そこに錯覚が成立していないことが明らかにされていると言うに等しいのである。

言語の問題があるなどと考える必要もない。たとえば、〈真直ぐな棒が水に浸されて曲って見えている〉という語り方は、最もうまく状況を記述しているのであって、このかわりに、センス・データを見ている、などという用語法は全然必要がないというわけである。錯覚論法はいかなる錯覚も提出しておらず、提出された時点ですでに解かれるべき何らの問題もなくなっており、それゆえ錯覚論法はいかなる意義をも持たぬ、とオースティンは主張しているのである。⁽¹⁾

これを承認すると、真正の場合と欺きの場合とで知覚に本質的な差異はない、という主張も崩れる。なぜなら、錯覚論法のいわゆる欺きの知覚なるものは、提出された時点で、それがいわゆる真正の知覚とは異なることが明らかにされているのだから。夢と現実とが区別不能ではないかという有名な事例をとろう。夢を記述するのには覚醒時の経験を記述するのと同じ語句が用いられよう。とはいえ、この二つ経験が、正確に類似しているわけではない。さもなければ、片方が夢の記述であると指摘されうるはずがない。夢は欺きでも錯覚でも覚醒時の経験でもない。「夢は夢なのである (op. cit. Ⅲ)」

さらに、エイヤーがセンス・データ言語導入の直接の根拠とした日常言語の意味分析も正しくない。エイヤーのように、一個の単語を取り出して意味を論ずることがもともと不当である。文全体、或はむしろ、発話の状況全体、を考慮しなければ意味を論ずることはできない。〈私は曲って見える棒を見ている (I see a stick which looks crooked.)〉という文が、何かが本当に曲っていることを示唆せぬのは、see の意味によってではない。それはむしろ文全体の働きなのであり、強いて一部を取り出すならば、明らかに look crooked の箇所の働きであろう。また、何かの理由で視覚像が二重になっている時に〈私は二枚の紙を知覚する〉と言って、これが〈二枚の紙がある〉を示唆せぬのは、〈知覚する (perceive)〉の意味によるのではない。それは、発話の状況として、二重の視覚像を持っていることがあらかじめ前提されているからにすぎない。

真相は、日常言語においては、単語は様々の文脈いろいろな発話状況で使用されうる、ということである。センス・データおよびセンス・データ言語の導入が正当化されるような特別な意味が、perceive, see 等の語にある、と主張する根拠は一切ない。これがオースティンの考えである。

整理すれば、知覚の直接的対象がつねにセンス・データであると主張する根拠は一切存在しないこと、知覚の対象はもっと多種多様であること、ひいては、センス・データ言語よりも、我々の日常の言語の方が、ずっと的確かつ精細に知覚経験を記述しうること、これらがオースティンの批判の骨子である。

ここに至って、我々が先に提出した疑問のひとつに答が与えられる。エイヤーは、どうやって知覚過程の不変の事実を同定したのか? エイヤーは、日常言語を用いて同定したのである。センス・データ言語は日常言語が記述する事実を変えぬとエイヤーは主張し、オースティンはおそろしく変えてしまうと反論していることになる。この点では、オースティンの反論に理があると考えられる。

ここまでのオースティンの批判によって、エイヤーの所説は完全に覆えられたであろうか。そうではないように思われる。

エイヤーがセンス・データの導入において本質的に依拠しているのは、知覚の対象は異った観察者に対して異った現われ方をするという事実であると思われる。錯覚論法も、混乱したやり方ではあれ、この事実を指し示そうとしている。また、オースティンも等しくこの事実を認めている。知覚の対象が日常言語において様々に記述されうると主張することは、まさにこの事実を指摘するものであるのだから。

我々の知覚は、時間的・場所的な局所性を持っている。視覚を例にとれば、知覚の対象としてある時まさに見えているのは、あるパースペクティヴにおいて見られた対象にほかならぬ。だからこそ、ある所から円く見える硬貨は、別の所からは楕円形に見えるのである。ところが物体としての硬貨とは、円くも見えるし様々な楕円形にも見えるところのものである、と言うべきだろう。換言すれば、我々が〈硬貨〉と語る時に一挙に了解しているものの、或るひとつの姿態を我々は見ているのである。よって、知覚の成立現場での〈見え姿〉は、日常言語によって一挙に了解されているところの〈対象〉と同じではない。そうであるから、この見え姿を経験的な知識の基礎に置くことは正当ではないか。なぜなら、我々は局所的な知覚経験を積重ねつつ、全体としての対象を知って行くのであるから。

エイヤーのセンス・データ論の根本的志向は、この点にある。そして、この点については、オースティンは“Sense and Sensibilia”の中で明晰な批判をしていない。よって、エイヤーのこの根本的志向を検討することが我々の課題となる。

問題はセンス・データの私秘性の規定にかかわっている。というのも、経験的知識の基礎たるべき見え姿は、ひとりの人の個別的経験に出現するのであるから。もちろん、知識の基礎は記述可能でなければならない。即ち、私秘的なセンス・データにもっばら言及するところの、センス・データ言語の成立可能性が第一の問題である。

今、眼前に硬貨があるとする。その見え姿を記述するにはどうしたらよいのか。〈それは直径しかじかで色はかくかくなる円形である〉と語ったとする。だがこの記述は、この記述を満たすすべての見え姿の記述である。よって、特定のひとりだけでなく、別の誰もがこれを満たす見え姿を持つことが可能である。記述に出現するあらゆる語がいわゆる一般語（general term）であって、それらは特定の人物の持っている見え姿を語っているだけではない。つまり、この種の記述はどんなに精細にしてみても、見え姿の私秘性を的確に表現するとは言い難い。

方針を変えて、見え姿のいちいちに名前をつけて行くことにする。名前 $P_1, P_2, \dots$ という無限個の名前の系列が得られるだろう。だがこの系列はいったい何を記述しているのだろうか。じつは何も記述していない。無限個の名前の系列が与えられた時に、それがいったい何の名前なのかわかる者などいるはずはない。何の名前なのか（つまり、何の記述なのか）わかるのは、それが〈硬貨の〉

ある見え姿の名前である、というように、日常言語の語彙を援用する場合だけである。さらによく理解できるのは、ある名前 *Pi* が、どういう見え姿なのか日常言語で的確に記述される場合であるだろう。つまり、名前だけをどれだけ寄せ集めても、記述力を持ち、従って理解もされうるような言語は形成されないのである。⁽²⁾

よって、センス・データ言語が本当に言語たりうる場合には、それは私秘的对象のみならず公共的对象にも言及するのであり、まったく純粋に私秘的对象を語ろうとする場合には、その語りは言語たりえないのである。だから、エイヤーのように私秘的なものとしてのセンス・データを経験の出発点に置こうとしても、純粋にそれのみに言及しかつ言語でもありうるような語り方は存在しえない。このことは、我々が私秘的な対象としてのセンス・データなるものについて語りうるのは、つねに公共的な対象のある性格としてだけであることを示している。つまり、異なる観察者に異なる見え姿を呈示するという性格である。すなわち、対象の私秘性という概念そのものが、対象の公共性という概念によってのみ定義されうるようなものなのである。

センス・データの私秘性から物体の公共性へと至るためのエイヤーの方法が、どうしてうまく行くのか、という先の疑問にも答えが与えられる。明らかに、センス・データの私秘性それ自体が、物体の公共性に基いて定義されるものだからである。換言すれば、センス・データ言語が相異なる人物間で了解可能なのは、私秘的なセンス・データにもっぱら言及するといいいながら、センス・データ言語が日常言語の語彙をそのまま借用しているからにすぎない。

以上のようにして、知覚経験の時間的・場所的局所性という知覚の根本的事態にたちかえって反省した場合にも、私秘的なセンス・データともっぱらこれに言及する言語とを経験的知識の基礎とすることは不可能であること、このことが明らかになった。

ところが、まだエイヤーの主張のすべてが覆されたことにはならぬ。エイヤーは、物体に言及する言語も我々の使用してよい言語として保存していたのだから、センス・データ言語がセンス・データのみに言及するのではないことになってもかまわないであろう。センス・データ言語の有用性はむしろそれが訂正不可能な文を構成する点にあるとして、ここに経験的知識の基礎がある、と主張できるのである。

しかし、センス・データ文は訂正不可能ではない。それを以下で示そう。

センス・データ文の訂正不可能性は、*esse est percipi* という規定に由来している。このセンス・データはこのように感覚されているのだから（ということは、そのように存在しているのだから）、この感覚のありようのみに言及すれば、誤るおそれはないというわけである。このことは、センス・データはそれが感覚されているように感覚されている、という事実の不可疑性に基いていると考えられる。換言すれば、〈このセンス・データはこのセンス・データである〉という言明の訂正不可能性が、センス・データ文の訂正不可能性なのである。そしてもちろん、この言明は訂正する必要がないものである。

しかし、センス・データ文が記述力を持った文であろうとするかぎり、上の言明の空虚な真理性から離脱して、〈このセンス・データは赤い〉といった形で文が表現されねばならない。このとき、訂正の可能性が当然ありうる。言葉の正しい用法としては、〈これは緑色だ〉と言わねばならない

かもしれないから。

エイヤーはこの訂正可能性を承認していたが、これは単なる言葉上の訂正であるから重要でないと考えていた。というのも、呼称をどう変更しようと、センス・データは、それが見えているように見えていることにかわりはないのだから、というわけであろう。だが、エイヤーの考えは正しくない。

見えているように見えている、ということは、このセンス・データはこのセンス・データである、ということにすぎない。そして、このことからセンス・データ文の訂正不可能性が直接に出てくるのであったら、そもそも言葉上の訂正を受け入れる必要がない。

どんな反論に出会おうと〈これは赤い〉と主張し続けるとしよう。〈誰が何と言おうとこれは私には赤く見えているのだ〉と言い張るわけである。どんな反証を提示されても〈これは赤い〉と発話することは可能である。よってこの言明は訂正不可能を持つといってもよい。だが、あらゆる可能な反証に反して〈これは赤い〉と言われるとしたら、この発話によっていったい何が言い表わされているのか、結局他人には全然わからないことになるであろう。

つまり、〈これは赤い〉という言明は、この場合には、〈これは私がそれに与えるところの名前‘アカイ’を持つ〉と言っているに等しい。明らかに、これは、〈このセンス・データはこのセンス・データだ〉という言明そのままである。だから、この自同律のみに依拠するときには、言葉の訂正すら受け入れる必要がない。だが、この時には、語られる文は経験的世界については何も語っていないのである。

センス・データ文に関して言葉の訂正を承認するということは、他人にも理解され得るように〈これは赤い〉と語ることを意味している。この場合の発話は、発話の時点で与えられている対象にのみ言及しているのではない。普通の意味において赤いところのものの集合全体に、言及していると考えべきである。そしてセンス・データ文で訂正がおこるのは、〈このセンス・データ〉が、発話において想定されている上記の集合の元とはならぬと判明するからである。訂正が成立するときには、センス・データの同定のやり方が訂正されるのであり、それが何である（と見える）のか、が訂正されてしまうのである。

もちろん、この訂正が成立したからといって、あるセンス・データについて、それが見えるように見えているという主張は訂正されない。言うまでもなく、この主張は、〈このセンス・データはこのセンス・データだ〉という自同律に基づいているのであるから。

訂正されるのは、それがどのように見えるのか、である。そして、どのように見えるのかが訂正されるとしたら、このときに対象についての了解のしかたそのものが訂正されていることを意味する。はっきり言えば、〈これは赤く見える〉が〈これは緑に見える〉に訂正されたならば、前者の文は偽なる文だとわかった、ということなのである。

かくして、言葉上の訂正を承認することは、センス・データ文が偽となりうると認めることである。この言葉上の誤りは、物体文に生ずる誤りと全く同じ構造を備えている。たとえば、〈この物体は本である〉という文が訂正されるのは、本であるとするために必要な性質をそれが保有していないと判明した場合である。つまり、普通の意味で本であるものの集合全体に言及し、かつ当該の物体がその集合の元でないと判明した時に、訂正がおこる。明らかに、センス・データ文の誤りの構造もこれ

と同じである。だから、センス・データ文の特権的な訂正不可能性は主張できないのである。

とはいうものの、物体文は、言語使用にいくら習熟していても、後の観察報告によって訂正されることがあるのにくらべて、センス・データ文は、言語使用に習熟してさえいれば訂正されることはないのだから、センス・データ文は、事実上は訂正不可能ではないのか。このような主張が考えられよう。これに対しては、オースティンが次のように反論する。

「たしかに、それら〔センス・データ文…筆者補〕の発話によって語られることが、事実上訂正不可能である場合は多いだろう。つまり、それらの文を取り消す有力な理由が何も示されない場合は多いだろう。……このことは、私が、その言明を作るのに最も好適な位置 (position) を占めている、ということによるのである。……私がそういう位置にいるかいないかということは、言明を作る際にどんな種類の文を私が使うかという問題ではなく、私が言明を作る際の状況 (circumstances) がどうであるかという問題なのである (op. cit. X)」すなわち、眼前の対象をよくよく調べてみて、かつ用語法にも習熟していれば、〈私は何か赤いものを見ているようである〉という文も〈これは犬である〉という文も事実上訂正不可能でありうる。問題は文の種類ではない。さらに、発話の状況に応じて事実上訂正不可能な文が、物体に言及する文にもいくらかもあるのだから、「物体についての言明は検証を必要とする、ということが一般的には真でない (op. cit. X)」のである。事実上の訂正不可能性という形に主張を弱めてしまえば、センス・データ文がつねに物体文を検証する地位を占める、という主張が成立しなくなる。エイヤーがセンス・データ言語の主要な任務とみなしたであろうものが、こうして、実は不必要であることになるのである。

小論の最初で、その検討の中心としたことがらに答えることが、ここに至って可能となった。

第一に、経験的知識の基礎としてセンス・データを置くことは正当でない。

筆者は、知覚経験が時間的・場所的な局所性を持つことを否定しない。ある知覚の成立現場における〈見え姿〉は、確かにあると言ってよい。〈見え姿〉は *esse est percipi* だと言ってもよい。だが、*esse est percipi* なるもののみから経験的知識が発すべきであるという主張は否定する。なぜなら、そのものを語る言語を我々は持ちえないのであるから。

第二に、センス・データを導入することによってはじめて、我々が外界について認識しようと言うことができるようになる、という主張は正当でない。なぜなら我々は、センス・データを導入するより前に、すでに日常言語を用いて語ることによって、外的世界との交渉のうちにいるのだから。⁽³⁾

この第二の問題は、知覚表象説の矛盾をいかにして脱するか、という問題である。この問題には解決が与えられている。知覚経験における、認識主観の私秘的な対象としての見え姿 (知覚表象説における内的表象) とは、実は先立って外的な対象に言及することによって定義されるのであること、このことが確認されたからである。内的表象について語りうるのは、いつも外的対象 (公共的世界) についてすでに我々が語りうるゆえなのである。知覚表象説の矛盾とは、内的表象のみに言及することが我々にとって可能であるという誤解から生じた擬似問題であると言えよう。

どんな言語であれ、それを用いて語るということは、我々がそのとき公共的世界との交渉のうちにあるということを意味している。経験的知識の基礎はここにある。

註

- (1) 錯覚論法の主張が、錯覚（ないし誤知覚）が存在するからには真正とされる知覚も実は錯覚かもしれぬ、というものとすると、オースティンの議論は的を射ていないと反論されるかもしれない。彼は、真正の知覚との相違が、もしあるとすれば、うまく記述される事例のみを取上げているからである。だが、この反論は正当でない。なぜなら、真正の知覚も実は錯覚かもしれぬという主張がもともと意味をなさないのである。この主張は、いかなるテストによっても錯覚であると判明せぬ錯覚があるかもしれぬ、というものである。しかし、どんなテストによっても錯覚と判明せぬものは、錯覚とは呼ばれない。ちょうど、どんな検査によっても色盲であると判明せぬ者は色盲と呼ばれないように。（cf. Max Black, “Language and philosophy” part I）
- (2) エイヤーは、センス・データを記述する十分に精巧な語彙（a sufficiently elaborate vocabulary）が作れぬ理由を、事実上の困難と考えたようである。（op. cit. V-22）この点でエイヤーは、ひとつひとつの観念に名前をつけるのは困難であると述べたジョン・ロックの立場と殆ど同じである。（cf. “An Essay concerning Human Understanding” Bk III, chap. 3, sect. 2）だがこの不可能性は、本当は、事実上のものではなく論理的不可能性である。ある個別的経験内容に名前をつけるためには、それを他から区別する普遍が要求される。だから、固有名を含む言語は必ずいくつかの一般名辞（general term）を含まねばならないのである。（cf. R. S. Woolhouse “Locke’s philosophy of Science and Knowledge” chap. 6）
- (3) 筆者は、日常言語の記述によって、外的世界の事物に対する我々の知的関心がすべて解決される、ということを主張しない。また、事物が、日常言語で記述されるとおりに実在するということも主張しない。だから、日常言語の記述が不十分であったり誤りであったりすることをもちろん承認する。しかし、不十分である時も誤りである時も、我々は実在のものについて語っているのであって、見え姿について語りうるのは、実在のものを語ることを学んで後のことであると考えべきなのである。（cf. Wilfrid Sellars ‘Empiricism and Philosophy of Mind’ in “Science, Perception and Reality”）

〔哲学 博士課程 2 回生〕

umschlagen läßt, das ist nichts anderes als der Mut, der bei Nietzsche von zentraler Bedeutung ist. In diesem Aufsatz wird versucht, die Bedeutung des "Mutes" bei Nietzsche im Zusammenhang mit dem Begriff "der Wille zur Macht" zu erörtern.

On Phenomenalism

by Hitoshi Tamura

I will discuss, in this paper, the phenomenistic analysis of our sense-experience carried out by A.J.Ayer in "The Foundations of Empirical Knowledge".

Ayer proposes that we should regard the objects of our perception not as material things (public objects) but as sense-data (private objects). And he says the sense-datum language provides us with the best terminology to analyse the relationship of our sense-experiences to the propositions we put forward concerning material things. In "Sense and Sensibilia", J.L.Austin criticizes what is told by Ayer and says the ordinary language can far better describe our experiences. But his criticism is not enough to reject Ayer's proposal.

I show that the private object of our sense-experience can be introduced only when we have already referred to the public object, and that it is logically impossible in any language to designate a purely private object. Then, we can safely say that the phenomenalism is of no use in analysing our sense-experiences and that 'the foundations of empirical knowledge' are not in the privacy of our sense-data but in the publicity of the material world.